☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット　News Letter

第３４号　２００３年９月１１日（木）　発行：歴史資料ネットワーク（神戸大学文学部内）

（宮城県北部地震被災地調査の様子・
2003/8/1・於矢本町）

■□■目　次■□■

緊急特集
宮城県北部地震の被災史料保全と支援募金にご協力ください！　松下正和・・・２
東北視察スケジュール　・・・３
被災調査と救出活動の現状　大国正美・・・５

５年目の火垂るの墓　辻川　敦・・・６
淡河の歴史セミナー第１回「淡河本町周辺の史跡」参加記　村井良介・・・９
大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・歴史資料ネットワーク共催（京都民科歴史部会　後援）
「阪神・淡路大震災記念　人と防災未来センター」見学と検証のつどい　佐賀　朝・・・１０
「見学と検証のつどい」参加記　廣川和花・・・１２
震災史料整理の現状と課題　添田　仁・・・１３
古文書整理参加記　大石弥栄・・・１４
会員対象アンケート集計・結果報告　・・・１５

■各研究会情報
神戸都市史研究会　三村昌司・・・１８
西摂研究会　河野未央・・・１８

◎◎おしらせ◎◎
〈わがまち再発見〉
よみがえれ！白鳳の大伽藍・猪名寺廃寺市民フォーラム　・・・１９

宮城北部地震の被災史料保全と支援募金にご協力下さい！

歴史資料ネットワーク事務局長　松下正和

５月の東北地震の余波も収まらないうちに、７月２６日に宮城県で最大震度６強の地震が発生しました。被災地にお住まいの会員の皆様に対しまして、謹んでお見舞い申し上げます。

▲上館下から中小松のあたり、全半壊家屋が多い

事務局では、地震発生後すぐに現地の自治体とマスコミ宛にお見舞いと史料保全を要請するＦＡＸを送付しました。地元の歴史研究者と調整を行いつつ、８月１日には奥村代表をはじめ河野未央事務局員と私の三人が被災地入りをし、東北大学の平川新氏と宮城学院女子大学の菊池勇夫氏に同行をお願いしました。まず、県教委や博物館を訪問し、被災史料保全活動への協力を求めました。県に矢本町へ連絡をとっていただいた後、我々一行は今回の地震の震源地矢本町へ向かいました。仙台空港から仙台市内に向かう車中では正直被害の大きさをあまり感じませんでしたが、三陸自動車道にのり矢本町へと近づくにつれてブルーシートに覆われた屋根を多く目にするようになりました。実際に矢本町に入ってみると、波打つ道路と倒壊家屋の多さに驚きました。その様子は、鳥取県西部地震規模の被害と同様にみえました。

▼矢本町Ｋ家、壁に×印の亀裂がはしる

矢本町職員によるご案内で、県の文化財基本台帳をもとに２，３軒訪問しました。訪問したお宅の被害状況のひどさを目の当たりにし、改めて地震の大きさを確認することとなりました。幸いご家族の皆さんは無事でありました。訪問先のお宅では直接史料を確認することはありませんでしたが、河南町の親戚宅の蔵が解体予定であるとの情報を得るなどの成果がありました。その後、上館下から中小松のあたりを歩いて状況を確認しましたが、どのお宅も半壊・全壊のお宅が多いように感じました。

９月５日発表の宮城県の報告によりますと、県内の全壊棟数は 1029 棟､半壊と一部損壊を合わせると 10531 棟という被害になるそうです。

帰神後、被害の大きさに比べてマスコミ報道が少なく、その実態が歴史関係者にも伝わっていないことを危惧した我々は、８月４日には神戸大学文学部において史料ネット運営委員とマスコミ向けに緊急報告会を開きました。その結果、毎日（８／４付）のサイト、神戸・産経（８／５付)、朝日（８／９付）の各紙にその模様が取り上げられました。

地震発生より１ヶ月近く経った現在では、地元の歴史研究者を中心に河南町においてレスキュー活動が行われ、成果もあがっています（最新情報は、史料ネットホームページをご覧下さい)。今回も、これまでの震災後の活動と同様にボランティア保険加入料を始め様々な経費が必要です。また、県による住宅再建支援金の支給も始まったこともあり、建物の解体スピードも一層早まっています。現実に蔵の解体の際に史料を廃棄してしまった例もあったようです。こうした家屋の解体に際し史料が廃棄されてしまうのを防ぐ活動をサポートし、また救出された歴史資料の整理作業も同時に進めていくためには、長い時間と多くの人手が必要となります。

史料ネットは今回の宮城地震でも、現地で活動をすすめている歴史関係者や地元住民の方々と協議し、支援のセンターとして全国からの募金のとりまとめを行ってまいります。会員の皆様におかれましては、

被災した地域歴史遺産の救出・保全活動に引き続きご理解を賜り、現地の地域歴史遺産保全の活動を支えるための募金をお寄せいただきますよう、よろしくお願いいたします。

宮城県北部連続地震被災史料救出活動支援募金（郵便振替）
口座番号：００９３０－１－５３９４５
加入者名：歴史資料ネットワーク

※振替用紙に宮城県北部連続地震カンパとお書きください。

〔問い合わせ先〕
●歴史資料ネットワーク（代表　奥村　弘・神戸大学助教授）
〒657-8501　神戸市灘区六甲台町 1-1　神戸大学文学部内
e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp　TEL&FAX　078-803-5565（平日 13 時～17 時）
URL：http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/
●宮城史料ネット（仮称）
連絡先　平川　新（東北大学教授）
e-mail:hirakawa@cneas.tohoku.ac.jp　TEL：022-217-7693（研究室）

（まつした・まさかず／神戸大学大学院文化学研究科）

◎◎８／１東北視察スケジュール◎◎

事務局作成

スケジュール		会議の内容等
9:30	仙台空港に到着、平川新氏・菊池勇夫氏と合流。自動車で移動	
10:15	宮城県庁に到着、文化財保護課にて白鳥良一氏（課長）・真山氏と会議	・歴史資料ネットワークの活動紹介・文化財保護課の現状説明など情報交換 ・文化財保護課＝指定文化財の現状調査の段階 ・博物館等の機関・自治体との連絡、「つなぎめ」の役割を果たしていただけるよう要請／早速矢本町へ連絡を入れる ・「斉藤善右衛門家文書」史料保全の依頼が県の文化財課・奥羽史料調査会の両者へ出されていることなど確認 ・総括集・ＮＬの贈呈
11:10	会議終了	
11:15	宮城県庁出発	
12:00	東北歴史博物館到着	
12:20	東北歴史博物館塩田達也氏・籠橋俊光氏と会議	・歴史資料ネットワーク活動紹介など情報交換 ・後日、東北歴史博物館へ現地の大学関係者より依頼書を提出する（自治体・文化財関係間の連絡等の担当を要請） ・今回の地震への対応とともに、３０年以内に確実に起こると言われている地震の際の体制づくりの必要性を訴える（平川氏より） ・河南町の現状など（町史編纂＝総務課） ・総括集・ＮＬの贈呈
13:05	会議終了	

13:50	矢本町到着、現地視察（車内より）	
14:04	矢本町コミュニティセンターにて宮城県文化財保護指導員松谷英世氏・矢本町教育委員会社会教育課佐藤敏幸氏と会議	・歴史資料ネットワーク活動紹介など情報交換 ・「宮城の文化財基本調査」（平成３年３月、宮城県教育委員会作成）の紹介（＝文書等所在の基礎台帳・ただし、情報がかなり古い／基礎は昭和４８年に作成されたもの） ・指定文化財被害状況調査書の紹介 ・文化財指導員が町村に１名、市に２名存在＝ネットワークづくりを依頼 ・矢本町、南郷町付近被害が甚大 ・木村家などの紹介 ・総括集・ＮＬの贈呈
14:57	会議終了、松谷氏・佐藤氏の案内により、現地視察（矢本町上館下付近）	
15:08	石垣善夫氏宅訪問	・今回の震災がきっかけというわけではないが、文書はすでに焼却処分されたとのこと
15:18	木村信弘氏宅訪問	・オグラ氏（元東北大学教員）により、農村型住宅として設計 ・古文書類（宗旨人別帳）は現在でも若干保管されているとのこと ・河南町の親戚のお宅が来週月曜日解体される旨情報提供いただく（文書所蔵／蔵の解体） ・解体業者より情報提供も要請していただけるとのこと ・一般に、「岩倉」（基礎より１mほどが石積になっている蔵）の被害が大きい ・河南町の被害が大きい ・家屋内の被害状況確認 ・木村氏宅裏手にある不動明王像付近、落石のあとなど周辺被害状況確認
16:20	佐々木壽男氏（町会議員）宅訪問	・震度６以上の３度の地震のうち、２度目の地震が最も被害が大きかった旨確認
16:55	矢本町の被害状況、写真撮影等、巡見終了、仙台空港へ移動	
17:36	仙台空港着	
17:49	空港にて平川氏・菊池氏とともに今後の活動についてうちあわせ	・新聞報道に取り上げられていないものの、被害が予想以上に大きかったことを確認 ・今後の組織作りとカンパについて 来週中（８／４～）史料ネットＨＰにアップ、史料ネットよりカンパの要請 ・来々週、小林氏現地入り⇔現地での組織作りとともに ・８／４・13:30～史料ネット緊急報告会（運営委員会） ・各学会へのカンパ活動⇔関東の学会への呼びかけ ・平川氏・菊池氏へ総括集・ＮＬの贈呈
18:35	仙台空港発	
19:40	大阪空港着	
19:56	大阪空港にて奥村・松下・河野でうちあわせ	
20：00	解散	

◎◎被災調査と救出活動の現状◎◎

（以下の文章は、宮城史料ネットの平川教授から送られてきたメールでの現状と救出活動報告をもとに、大国正美氏がまとめられたものである。）

史料ネットでは八月一日に奥村弘・代表ら三人が日帰りで宮城県に出かけ、矢本町で現状の把握を行うとともに、平川新・東北大学教授らと、今後のレスキューの進め方や現地の組織設立を協議。四日には神戸大学で現状報告会を行った。その後、宮城史料ネット（仮称）が発足、活発に活動を始めている。

【八月六日】宮城史料ネットと桃生郡の河南町教委が現状調査。この日は、宝が峯縄文記念館（近代の巨大地主・斉藤善右衛門屋敷、公営ではなく斉藤家による経営）、河南町歴史民俗資料館立教堂、斉藤家の分家のひとつの三件を調査した。

○宝が峯縄文記念館

縄文記念館には、いくつもの大きな土蔵があり、それらを活用して宝ヶ峯遺跡から出土した土器などが展示されているが、土器はほとんどが破損。また非公開の土蔵には、主として幕末・明治以降のものと思われる帳簿・文書類の入った箱が数十箱、大正時代の新聞、書籍類などが納められているが、新聞棚などは倒壊、文書箱もいくつかは転げ落ちている。土蔵自体の破損もかなり大きい。

○河南町歴史民俗資料館立教堂

建物は昭和四年建築だが、今回の地震で玄関屋根の部分が完全に倒壊。内部には主として民具や土器を展示してあったが、破損土器が多く、民具もかなり倒れた状態にある。

○斉藤家分家

母屋は二百年ほど前の建築。土蔵も二つ。屋敷門や塀は大きく倒壊。母屋にもゆがみが出た。土蔵は外壁が大きく崩れ落ち、内部も床が落ちてひどく散乱している。

【八月十日】河南町に二十六人が入り、歴史資料等の現状調査と、宝が峯縄文記念館の文書・新聞資料の救助活動を実施した。

現状調査チームは四班に分かれ、宮城県文化財保護課が作成した『宮城の文化財基本調査』リストの三十一件、町教委による追加把握九件の合計四十件のリストをもとに、二十一軒の個人宅を訪ね、被災状況を確認した。屋内や蔵内の片づけなどを終えていない家が多く、復旧にはかなりの時間を必要としている。

調査の結果、多くの所蔵者宅で無事に保管されていることが確認できたが、なかにはリスト記載の古文書をどこにしまってあるか分からない▽被災した蔵を先日解体したばかりで、そのなかに古文書があったかもしれない▽蔵のなかはめちゃくちゃなので古文書を入れた葛籠がどうなっているか分からない―といった所蔵者もあった。また原本は見あたらないが残っていたコピーは町教委も把握してなかった文化・文政期の文書であったというケースもあった。

保全チームは宝ヶ峯縄文記念館に十八人を投入して、一〇〇箱にものぼる文書箱を搬出し、倒壊した新聞棚からは大正期の時事新報や国民新聞や近世末から明治・大正期の帳簿類を救出。

【八月二十三日】河南町で第二回目の被災資料救済を実施。東京や史料ネットからの参加も含め十七人が集まった。一班は、全壊指定をうけた町立歴史民俗資料館立教堂から、民具や農具などの展示品を運び出し、トラックやワゴン車三台で多賀城の旧東北歴史資料館の倉庫に搬入した。

二班は六グループに分かれて町内の文化財等の現状調査とレスキュー活動を行い、県の『文化財基本調査』のリストなどを手がかりに、町内二十七軒を訪問。その結果、蔵のなかに証文などがいっぱいあったが、蔵が破損したので一週間前に解体し、全部捨ててしまったという所蔵者があった。また今回の地震とは別に、今年二月に母屋と蔵を解体し骨董屋などに全部売ってしまったという家もあった。

一方で仮設住宅に移らなければならないほどの被害を受けたある家では、蔵を壊すためバンの荷台がいっぱいになるほどの掛け軸や古文書などを、緊急レスキューし、教委の倉庫に預けた。

【八月三十一日】河南町の宝が峯縄文記念館（斉藤善右衛門屋敷）で、古文書・新聞・書籍類の救出・

整理と、縄文土器類の搬出作業を行った。参加者は滋賀や東京からも含め総勢四十一人。作業は、七グループに分かれて行った。一班では、損壊の激しい表土蔵(文書蔵)から大正時代の新聞などを隣の展示資料館に搬出。二班は、前回、表土蔵から搬入した古文書約九十箱を箱ごとに概要把握。三班は、地震で散乱した書籍類を段ボール箱二十箱余りに詰めて、展示資料館に運び出した。四班は、古文書や書籍類を段ボール箱五十箱程度整理した。五班は軸物や絵画などの現状を確認した。六班は、ショーケースから土器を慎重に取り出し、東北大学埋蔵文化財研究センターに搬出。七班は、午後から隣の矢本町の旧家二軒を訪ねて現状を確認した。

（おおくにまさみ、史料ネット運営委員）

◆◇火垂るの墓を歩く会◇◆

５年目の火垂るの墓

辻川　敦

◆◆第５回　火垂るの墓を歩く会◆◆

１日目　2003年８月５日（火）　参加者50人
２日目　同　　９日（土）
暴風雨警報発令のため中止

◆コースとプログラム◆午前９時30分、阪神香枦園駅集合　→　甲陽学院中学校にて説明（『火垂るの墓』と夙川・香枦園浜について、戦時中の甲陽学院について）→香枦園浜、回生病院見学、11時30分頃解散

年を重ねて

火垂るの墓を歩く会をはじめてもう５年。西宮のニテコ池周辺と香枦園浜、そして神戸市東灘区の御影周辺と、野坂昭如氏の小説『火垂るの墓』にまつわる３か所のスポットを順にめぐっている。だから、香枦園浜コースを歩くのも２回目になる。最初の２年は、定員50人の催しを１日だけ設定したので、申し込んで来られた方をずいぶんと断らねばならず、受付窓口となった史料ネットの担当者が叱られたりもした。それで３年目からは、同じコース設定で２日間実施するようになった。

そんなわけだから、この集合場所の香枦園駅も３年前に一度来ている。今日ひさしぶりに見て驚いたことには、阪神が高架化されたために、駅舎も建て替わってすっかり新しくなっている。改札口を出たところが屋根のある通路になっているので、集合場所にはちょうど都合がよい。スタッフも参加者もまだ姿が見えないので、壁面に埋め込まれた昔の駅舎写真のプレートを見たりしながら、しばらく時間を過ごした。

そのうち、三々五々参加者が集まってきた。親子連れが多いのだが、年輩の方も少なくない。みずから体験した戦時中の様子を、この機会に確かめたいということのことのようだ。こういった参加者の多様さがこの企画の特徴のひとつであり、説明内容をどのあたりにあわせるかという、むずかしさの一因にもなっている。児童・生徒の参加をうたっている割には、毎年大人向けの説明になってしまっているようなので、今年は思い切って子ども向けにと申し合わせたのだが、果たしてうまく行くかどうか...。

会の主催者の正岡さんとふたりで参加を受付け、資料を配っているうちに、西村豪くんもやってきた。今日のボランティアスタッフはこの３人だけ、参加人数に対してやや手薄だ。定例の会なので、主催組織をしっかり確立するというのも課題なのだが、果たせないでいる。以前は神戸空襲を記録する会と合同で、年に何回か学習会や会議を持ったり、空

襲体験調査の計画をたてたりもしたのだが、このところそれも沙汰やみになってしまっている。史料ネットが毎年バックアップしてくれなければ、見学会の実施も危ういところだ。

出発－甲陽学院へ

そうこうするうち、集合時間が来て人数も集まってきた。今年は、新聞各紙の取り上げが当初おもわしくなかったため、参加申し込みも低調だった。それで最終版になって再度各紙に告知をお願いしたところ、実施直前に朝日新聞が大きく載せてくれたので、駆け込みの申し込みが多かった。第１日目のこの日は申し込みが約 40 人。２日目の９日土曜日は申し込みが 50 人を越えていて、その後申し込まれた方々はお断りせざるを得なかった。実際に５日に参加されたなかには、実施直前に新聞を見たからと飛び込みで来られた方が４～５人、スタッフのボランティアが３人、記者さん２人（神戸新聞）と、総勢約 50 人であった。

香枦園駅を出発して、夙川沿いの遊歩道を南下する。このあたりはすでに、小説『火垂るの墓』に登場する場所だ。

小説のなかでは、主人公の清太と節子の兄妹が、1945 年６月５日の神戸大空襲で焼け出されて母を亡くし、西宮の甲陽園あたりの親戚宅に身を寄せる。汗ものひどい妹を海水で洗ってやろうと、清太が節子を連れて香枦園浜まで歩いていくのが、この夙川沿いだ。護岸の石積みなんかは多少変わっているが、松林の様子や昔ながらの石橋などは、アニメに描かれたそのままだ。

そんな風景を見やりながら、しばらく歩いたところで道を西に取り、角石町にある甲陽学院中学校に向かう。同校では、ご厚意により３年前にも、視聴覚室を使わせていただいている。

午前 10 頃、甲陽学院に入り、会場の教室が落ち着いたところで、まず主催者代表の正岡茂明さんがあいさつした。続いて、夙川・香枦園浜・回生病院が登場するアニメの場面を、参加者にビデオで見てもらった。

次に、甲陽学院の山内英正先生に、戦時中の甲陽学院の様子を話していただく。山内先生は、歴史教育者協議会のメンバーでもあり、毎回史料ネットや火垂るの墓を歩く会の企画に協力してくださっている。

続いて、ふたたび正岡さんから、『火垂るの墓』に登場する香枦園浜の場面や、野坂昭如氏の実体験と小説の関係などについて説明。しかしどうも聞いていると、山内先生の説明も正岡さんの説明も、あいかわらず子どもたちにはむずかしすぎるようだ。30 分もたつと、退屈してむずかる子たちも出てきた。次回はこのあたりも改善してもらわなければ、と感じた。

第５回「火垂るの墓を歩く会」甲陽学院中学校にて

説明の時間ののち、教室の後方に並べた、香枦園浜・回生病院の昔の写真パネルなどを参加者に見てもらう。これは正岡さんが、菊池貝類館からこの日のために借用してきたもの。回生病院の菊池先生は、医師のかたわら、みずから貝類館を開くほどの、世界的な貝の収集研究家でもある。

香枦園浜・回生病院

甲陽学院を出発したのは、午後 11 時過ぎだった。南に進んで、貝類館の前を通って香枦園浜へ。ここが、清太と節子のふたりが体を洗ったり遊んだりした砂浜だ。堤防上には、コンクリートの立派な遊歩道が整備されている。しかし、アニメに登場する美しい砂浜は見る影もなく痩せ、瀬戸内・大阪湾の広い海原のはずの視界は、いくつもの人口島にさえぎられて風情のないことおびただしい。

回生病院も建て替わっていて、アニメに登場する三角屋根の、おとぎの国のような特徴

的な建築はすでに見ることができない。しかし、夙川河口のあたりまで来ると、護岸の様子にわずかにアニメに描かれた風景の面影が残る。

もうひとつのポイントは、河口から少し北にのぼった左手にある、病院の玄関口だ。ここは、小説のなかで兄妹が看護婦親子の様子を見て母を思い出す場所なので、アニメにも建物が克明に描かれている。そして、回生病院のなかで唯一建て替えられずに残っている場所でもある。

そんなことを説明しながら見学し、11 時 30 分頃夙川堤防上で解散。その後、神戸新聞の小西博美記者が正岡さんに話を聞きたいといので、病院玄関前で撮影ののち、すぐ前にある喫茶で軽食をとりながらの取材となった。当日の企画内容から、会の来歴や目的などにまで話がはずみ、終わったのはおおかた午後１時頃だった。

この取材記事は、翌日の神戸新聞に比較的大きく掲載された。

夙川河口部分と回生病院

（新潮社『アニメーション火垂るの墓』より）

第２日目は中止

第２日目の９日土曜日は、折悪しく台風直撃の日と重なった。午前７時～８時の段階ではまだ警報発令中であったので、安全を期して中止と判断した。

今後に向けて

以上が、今年の「火垂るの墓を歩く会」の顛末である。この企画は毎年回を重ねて、すっかり定着してきた感がある。マスコミの協力もあって、毎回ほぼ定員一杯の参加者があり、内容面で多少の不備があっても、参加者の反応はおおむね好評だ。なかには、毎年のように参加されるリピーターもおられる。

経験を積むなか、企画内容も少しずつ改善してきている。多くの方が参加できるよう２日間の開催とし、涼しい午前中に時間を設定して、見学コースをしぼってむやみに長距離を歩かないようにした。申し込み受け付けや連絡体制も、史料ネット事務局の充実とともに整備されてきている。何よりも、正岡さんの『火垂るの墓』研究が着実に進んできたので、説明内容がどんどん充実してきていること。

今年は、資料作成の面でも、児童・生徒に理解できる内容を重視して工夫した。アニメ本などからとったイラストを多く取り入れ、火垂るの墓を歩く会の簡単な説明と、第二次世界大戦（太平洋戦争）およびＢ29 の空襲について概要説明ののち、小説・アニメに登場する見学コース上のスポットをわかりやすく紹介したので、持ち帰った後の感想文や参加レポートづくりにも使いやすかったのではないかと思う（この資料はまだ余部があるので、入手ご希望の方は史料ネット事務局までお申し出願いたい）。

その一方で、本稿で縷々触れてきたように、改善すべき点や積み残しの課題も多い。なかでも一番の課題は、毎年２日間のイベントに終わらせないための、会の組織づくりと取り組みの継続化だ。できれば、『火垂るの墓』のみならず、阪神地域の空襲・戦争体験全般の記録化や調査研究の共同化につなげていきたい... 毎年そんなことを考え口にしながら、なかなか具体化できないでいる。なにかよい提案があれば、ぜひ史料ネットまでお寄せいただきたいと思う。

（つじかわあつし、史料ネット運営委員）

◆◇淡河町講演会◇◆

淡河の歴史セミナー第１回「淡河本町周辺の史跡」参加記

村　井　　良　介

去る 2003 年７月５日に、淡河の歴史セミナー第１回「淡河本町周辺の史跡」が、淡河町自治協議会･淡河城跡整備保存会の主催で、神戸市北区役所淡河連絡所の大会議室においておこなわれた。

神戸大学文学部では、昨年度から地域連携事業をおこなっており、すでに尼崎市の富松城跡についての取り組みなどで連携事業をおこなっているが、今回のこの催しは、そうした活動を前提に、地元の要望を受けた神戸市教育委員会より、神戸大学に対し地域連携の要請があり、地元と神戸市教委、神戸大学文学部地域連携センターが連携して、淡河城や淡河地域の歴史を学ぶ取り組みを進めていくこととなり、講演会という形で実現の運びとなったものである。連携事業は講演会のみならず、可能であれば史料調査や、発掘調査なども含めて多面的に進められる可能性があるが、少なくとも講演会あるいは学習会といった形式ものは、継続しておこなうことになっており、今回はその第１回目として、神戸市教育委員会社会教育部文化財課埋蔵文化財調査係長の丹治康明氏に「淡河本町周辺の史跡」と題し、淡河本町周辺における発掘成果から、お話しいただいた。以下、地域連携研究員の立場から、参加しての感想を述べたい。

講演会は６９名の参加を得、盛況であった。講演は、主として縄文時代・弥生時代の話を中心に、中世まで時代を追って進められた。縄文時代では、中・後期の竪穴式住居跡が中村遺跡で発見されていること。弥生時代の遺跡は後期のものがほとんどで、弥生前期に関しては未解明の部分が多いことなどが説明された。古墳時代については、淡河町内では古墳が発見されていないこと。一方住居跡に関しては、階層差が明確でないことなどが指摘された。平安後期になると淡河町ほぼ全域で掘建柱建物が見られるようになるとのことであった。

地元の関心の高い淡河城については、いまだ発掘調査がおこなわれていないということで、すでに発掘がおこなわれている近隣の萩原城について説明された。萩原遺跡では１３世紀のものと思われる六角形の井戸が見つかっている。１６世紀において萩原城は有馬氏の城であるが、堀や虎口といった防御施設が検出され、また南西には家臣団屋敷と考えられる施設も発見されているとのことであった。

以上、講演の内容をごく簡単に触れたが、淡河地区のこれまでの発掘調査成果が、整理して提示された点で有意義であった。特に古墳時代において、古墳が発見されず、住居の階層差も明確でない点などは、地域の特質を考える上で重要ではないだろうか。また、淡河城には、のち有馬氏が入城するが、その有馬氏の拠点萩原城についての成果も興味深いものであった。

その一方、淡河城に関しては、いまだ発掘調査がおこなわれていないため、地元の方々が最も関心を抱いている点について触れることができないという歯がゆさが残った。今後、地域連携事業を進めるなかで、淡河城の発掘調査が実現すれば、この講演で述べられたような既存の調査成果と合わせ、より豊かな地域像が描けるものと思われる。

先述のように、今後も講演会・学習会といった形式のものを継続していくが、これを契機に、地元の方々が主体的に地域やその歴史について考えることのできる場になればと考えている。

（むらいりょうすけ、
神戸大学地域連携研究員）

◆◇人と防災未来センター見学会・検討会◇◆

大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・歴史資料ネットワーク共催（京都民科歴史部会 後援）

「阪神･淡路大震災記念 人と防災未来センター」見学と検証のつどい

佐　賀　　朝

昨年４月、さまざまな問題点を指摘されながら開館した「阪神･淡路大震災記念 人と防災未来センター」は、今年の４月に入り、二期工事分にあたる「ひと未来館」がオープンし、この間、全国から修学旅行をはじめとする少なくない入館者を受け入れ、一定の社会的認知を得つつあります。今回、史料ネットは、大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会と協力し（京都民科歴史部会も後援）、「大阪歴科協７月例会」という形でセンターを見学し、二期工事分も含めたセンターの現状と問題点、今後の課題などを「検証」する趣旨で、「見学と検証のつどい」を企画し、７月 13 日（12:30～17:00）に開催しました。

当日の進行は、以下のような順序で行われました。

◆見学タイム◆

12:30　「防災未来館」1F 入口付近集合

12:30～13:15

「防災未来館」震災資料室および震災資料収蔵庫見学と解説

13:20～14:50

「防災未来館」展示エリアおよび「ひと未来館」見学（休憩もふくめ各自で）

◆検証タイム◆

15:00～17:00　検討会

・コメント①（震災資料公開・利用の現状と課題について）

コメンテーター：

山村由華さん

（防災未来館・震災資料専門員）

佐々木和子さん（神戸大学地域連携研究員）

・コメント②（防災未来館の展示をめぐって）

コメンテーター：

菅祥明さん（震災・まちのアーカイブ）

・質疑と討論

前半の**見学タイム**では、まずセンター「防災未来館」（一期工事分、昨年オープン）内の震災資料室で、震災関係一次史料および図書などの二次史料の収蔵状況や検索システム、閲覧・公開状況などについて、震災資料専門員である山村由華さんに解説をしていただきました。収蔵スペースのほうも見学し、モノ資料も含め、ほぼ現在の史料保存技術の水準にそった保存・管理がなされていることを確認できました。参加者からも予想以上にたくさんの、また形態・内容も多様な原史料が収蔵されていることに注目が集まっていたようです。その後、いったん１階のエントランスまで戻った上で、一般の入館者がたどる見学コースに入り、最上階の「1.17 シアター」、「震災直後のまち」、「大震災ホール」（「ドキュメンタリー」映像「このまちと生きる」）を見学しました。続いて３階から２階にかけての展示部門を見学、時間の制約もあったため、このフロアからは各自見学とし、「ひと未来館」も含め、検証タイム再開の予定時刻までにそれぞれ見学していただくことにしました。

15:00 から開始された**検証タイム**では、まず**佐々木和子さんから「震災記録保存活動の取り組み」**、続いて**山村由華さんから「震災資料公開・利用の現状と課題について」**と題するコメントがありました。佐々木コメントでは、2000 年６月から 2002 年３月にかけて阪神･淡路大震災記念協会が実施した、「大規模

震災資料所在調査」の概要について説明があり、センターに保存されている震災資料の収集経過が明らかにされました。山村コメントでは、センター開館後の 2002 年度および 03 年度における新たな資料の調査・収集状況、さらには資料室での資料公開のしくみと実情、

現在までの閲覧申請状況などが説明されました。収集時点で公開の判断が、後日、所蔵者との「別途協議」にゆだねるとされた資料がかなりあること、資料の公開・非公開の判断にあたって、その是非を専門的に審査する機関がない、などの問題点の紹介もありました。つづいて**菅祥明さんから「「防災未来館」の展示をめぐって」**と題するコメントがあり、震災の記憶が生々しい現時点で「揺れの再現」という手法をとることの問題性、さまざまなメディアから切り取られた震災の断片的なイメージを並べる展示方法、施設の性格が「メモリアル」から「防災」へとシフトした経緯の不透明さ、などの問題点が指摘され、震災資料部門の充実をはかった上で、一次史料を活用した企画展を開催するなどの取り組みが必要ではないか、との提案もありました。

引き続いて行われた**質疑・討論**でも、限られた時間の中でさまざまな疑問や意見が出されました。ややアトランダムに挙げても、以下のようなものがありました。

・「膨大な一次史料があるのにどうしてこうした業者任せの展示になってしまうのか」
・「1.17 シアターで「再現」されている揺れは実際、リアルなものなのか」
・「揺れの「体感」は入館者の選択制にしてはどうか」
・「せっかく「揺れを体感」してもひと未来館で「癒され」たら全部忘れてしまうんではないか」
・「ここの展示は、友人である被災者から聞いた体験とはかなりギャップがあった」
・「ここの震災展示にはリアリティが感じられない。ここの展示がよいという人はいるのだろうか」
・「施設が大きいわりに震災についての展示スペースは少ないのではないか」
・「「防災」をうたっているが、防災も不十分という印象があった」
・「個人情報を含むものもかなり公開されているようだが、どうして可能なのか」
・「「ひと未来館」の建物の中に森を再現するという発想はまったくのナンセンスではないか」
・「「防災のため」という立場を批判するあまり「防災か歴史か」という二者択一に陥る危険はないか、防災のためにも史料や歴史研究が不可欠と考えるべきではないか」

以上のうち、最後の意見については、奥村弘史料ネット代表から、「防災拠点というセンターの機能との関係でも資料室を正当に位置づけることが必要であることはかねてから主張してきた。資料部門には資料や図書、さらには研究も含めた知的な財産が蓄積されていく必要があって、その意味でも現在のような資料室に対する低い位置づけを変えていくことが不可欠だと考えている」との応答もありました。センターを初めて見学した参加者の

率直な意見も出され、活発な意見交換がなされました。

この日のつどいには、関西の若手歴史研究者を中心に、37 名の参加がありました。史料ネットは、今後も各学会と連携しながら、センターが、被災地の住民の視点にもじゅうぶん配慮し、震災の総合的で歴史的な検証の手

助けをなしうる施設に充実していけるよう、積極的な提言を続けていきたいと考えています。歴史研究や史料保存、あるいは現代社会研究などに携わる広い分野の皆さんにも、引き続き、被災地での震災資料の保存・活用のための取り組みにご注目とご協力・ご参加をお願いします。

（さがあした、
桃山学院大学助教授、史料ネット運営委員）

「見学と検証のつどい」参加記

廣 川　和 花

大阪歴史科学協議会７月例会として開催された「阪神・淡路大震災記念 人と防災・未来センター見学と検証のつどい」に、大阪歴科協研究委員として参加しました。歴史研究者として、阪神・淡路大震災という歴史的事件にどうむきあい、後世へ伝えてゆくのか、また、現代史資料の保存・活用のありかたとはどうあるべきかといった問題意識から企画されたつどいでしたが、現状のあまりの困難さに圧倒されたというのが率直な感想です。

まず来館者に強烈なインパクトを与えるのはやはり「震災発生により都市基盤が崩壊していく阪神・淡路各地域の様子を大型映像により伝え」（同センターHP）る、「1.17 シアター」であると思うのですが、同時に歴史研究者をはじめとする、同センターのあり方に注目してきた人達の間でその是非について議論の対象ともなってきたようです。私自身は、地震の「揺れ」そのものを疑似体験させようという試み自体はそれほど否定的に捉えていませんが、問題はそこで「体感」したことによって生じる／思い出させられる地震への恐怖心その他の感情をいったいどこに（例えば災害への備えの必要性を喚起するとか、あるいは恐怖の中で犠牲となっていった人への鎮魂の念を持たせるといったようなわかりやすい落としどころでもかまわないわけですが）振り向けようとしているのかということが明確でない限り、それは単なる衝撃的なアトラクションにとどまってしまうのではないかと思います。というのは、私は見学中、次々と映し出される映像が「これはどこまでが本物の映像なのだろうか、本物でないとしたら、誰が、どのような資料を根拠に、どの程度の正確さをもって再現したものなのだろう？」という疑問で頭がいっぱいになりましたが、上映前にも後にも簡単な説明すらなく、謳われているはずの映像の「リアルさ」に疑念を抱かざるを得ませんでした。また、目の前で崩壊していく巨大な建造物の映像をこれでもかというほど見せられることで湧き上がってくるのは、災害に直面した時の一市民の限りない無力さでした。このような圧倒的な力を前にして、個人が備えておけることなどほとんど何もないのではないか（インフラの耐震化などは行政にまかせるしかないのだから）という気分にさせられたのです。災害への素朴な恐怖心がある程度の防災意識の高まりにつながることは否定しませんが、以上に述べた理由から、この「シアター」はそれにすら成功しているとは言い難いのではないでしょうか。

そしてこの「シアター」の再現根拠のあいまいさは、資料室に保存されている膨大な震災資料の管理部門と、同センターの研究・調査機関、展示部門とが断絶しているという問題と無関係ではないはずです。絶えず資料的根拠を問いながら、展示のあり方をも含めて一つ一つの展示をみる見学者はあるいは少数なのかもしれません。しかし、研究も展示もともに気の遠くなるような地道な実証の積み重ねの上にこそ成り立つのだと思いますし、このごく当たり前の常識が必ずしも常識でないところに同センターの根本的な問題点を感じた次第です。

（ひろかわわか、
大阪大学大学院）

◆◇神戸大学古文書整理◇◆

震災史料整理の現状と課題

添田　仁

歴史資料ネットワーク（以下、史料ネットと省略）によって震災時にレスキューされた史料の多くは、震災後、恒久的な保存機関への移管が難しいことから、史料ネットの事務局に保管されていましたが、平成14年7月以降、それらの史料の一般公開とその利用、さらには恒久保存の可能な機関が名乗り出てくれることを期待して、ボランティアによる整理を月1回のペースで行なってきました。＜なお震災史料整理の経緯と趣旨については、河野未央「震災史料整理について」（『史料ネット NEWS LETTER』30、2002年）、同「歴史資料ネットワークの組織改革について」（『日本史研究』488、2003 年）を参照のこと。＞仮目録の作成を当面の目標としたこの整理作業は、平成15年8月19日現在で計11回を数え、参加ボランティア人数116名、点数にして約1100点の史料の整理を終えています。多くの課題を残したままスタートした整理作業ですが、この間、課題の克服とはいかないまでも、開始当初とは異なるいくつかの変化が見られるようになりました。

まずボランティアについてですが、当初ボランティアの大半が神戸大学の学生もしくは大学院生で占められていたため、一部の学生の卒業・修了などもあり、作業の継続性に不安がありました。このように学生中心のボランティアになってしまったのは、作業を始めるにあたって、まずは本学の学生に声を掛け、他大学や一般の方々への宣伝が遅れたことが原因でした。とくに現在整理中の山本家文書は段ボール 47 箱に及ぶ膨大な文書群であるために、長期的な視野での整理が必要不可欠となるため、継続的に整理作業に参加していただけるボランティアの確保は急務でした。しかし、本年度6月以降、他大学と一般の方々の占める割合が増加し、特に一般の方々の割合の増加は目を見張るものがあります。これは、他大学や会員などへの宣伝は勿論、これまでの市民講座や種々のシンポジウムを介しての一般の方々への呼び掛けと、尼崎の古文書を読む会など他の市民団体との連携の影響も小さくないと思われます。

もう一つは、震災史料の整理と並行して、史料の活用も始められているということです。震災史料整理の一環で整理を行なった史料ではありませんが、神戸大学の学生を中心としたボランティアによって整理した地域の古文書について、卒業論文での利用を希望している他大学の学生も現れています。震災史料の有意義な活用が始まりつつあることは事業の趣旨から考えても大変喜ばしいことなのですが、同時にこれまで整理してきた文書のカード情報の一覧化とデータ化が急がれる段階に入ってきていると言えるでしょう。

これまで、震災史料整理に関して好転した局面をとりあげてきましたが、ここでいくつかの問題点を指摘しておきたいと思います。

一点目は、整理指導者の不足についてです。今後は、①地域の市民団体との連携やボランティア同士のつながりによる一般のボランティアの増員と②史料に関する予備知識の提供や文字解読の指導など一般のボランティアにも分かりやすい整理の質的充実、③②を受けてのボランティアによる整理技術の向上と作業のスピードアップを図っていくことなどが重要な課題となるでしょう。しかし、①から②を実現するためには、文字の解読が可能なより多くの史料整理経験者が必要となりますが、現在常時古文書の整理を指導できる者は

3 名しかおらず、①をなし得たとしても②の段階への進展が難しい状況にあります。一般のボランティアの参加者数の増加は勿論なのですが、それと合わせて、研究者や大学院生など指導能力を有する人材と史料整理を経験したことのある学生ボランティアのより多くの参加が望まれます。

二点目は、震災史料整理とは直接的には関係しないかもしれませんが、①地域のネットワークを活用したボランティアの増員のために、地域の団体による主体的な議論の場を提供する必要があるということです。これまで、史料ネットが行なってきた地域との交流は、講座・講演会という一方的な形が多かったように思います。しかし、それだけではなく、これからは、地域にバラバラに存在する NPO や諸市民団体、勉強会など、地域の団体同士の横のつながりの斡旋を行なう役目を史料ネットが担う必要もあるのではないでしょうか。少し抽象的な感は否めませんが、そうした中から歴史に対する関心の高揚を図り、震災史料整理のあり方についても議論していただければ、市民のボランティア等に対する関心もより深まっていくのではないでしょうか。

三点目は、二点目とも関連するのですが、震災史料整理を進めていくにあたって、そのあり方や今後について議論する場が極端に少ないということです。より具体的に、整理済史料の利用の仕方の問題や移管先の問題など、学生のみでは対応できない問題群について、様々な研究会において、様々な立場の人たちがもっと議論していくことが必要でしょう。

以上いくつかの問題点を指摘しておきましたが、事業については今後とも皆様ボランティアの積極的な御参加・御協力をお願いしたいと考えています。なお、今後の日程などは以下のようになっております。詳細は、史料ネットホームページにも掲載されておりますので、そちらも御参照下さい。

（そえだひとし、神戸大学大学院）

＊＊＊次回史料整理の日程＊＊＊

■日時：10 月 11 日（土）
午前 10 時から午後 5 時

■場所：神戸大学文学部古文書室
（文学部本館 4 階、JR 六甲道駅・阪急六甲駅より神戸市バス 36 系統「神戸大学文理農学部前」にて下車）

※参加にあたっては事前に史料ネット(tel&fax:078-803-5565e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp)まで、ご連絡をお願いします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

古文書整理参加記

大石　弥栄

私は、子ども家庭福祉及び母子保健関係の資料を収集・管理・提供している専門図書館の司書で、9 月になると働き始めて 24 年目に入ります。職場は 1934 年設立で、来年 3 月に創立 70 周年記念式典を 12 月までに 70 年史刊行が計画されています。以前 50 年史編纂（1988 年 12 月発行）に携わったので、70 年史の編纂にも加わることになりました。そこで、50 年史作成のときに各部署や施設から収集した資料で、整理できなかった貴重な書類等をこの機会に少し整理したいと考えました。毎年少数ですが、研究者や学生がこの未整理の史料を探して来るので、そのたびにとても気になっていたのです。

しかし、書類等は日常業務で取り扱う雑誌等の逐次刊行物や報告書･図書等とは異なり、しかも古い書類のなかには紙質が悪くて触ると壊れてしまいそうなものがあるので、何かいい方法はないかとインターネットを使って調べている時に「史料整理ボランティアの募集」が目にとまりました。あっ、何か学べそう！と勝手に思い込んだのがきっかけでした。

実際の作業にはじめて参加したときは、どんな資料を対象にどんなことをしているのかも知らず、ただ、『仮目録の作成』という文字を頼りに、付き合ってもらおうと気軽に母を誘い出かけて行きました。参加者は、学生（院生？を含む）と社会人（主婦・退職者？を含

む）が半々くらいだったでしょうか。説明を受けどきどきしながら目録とりの作業を始めると、最初から分からず、調べようにも、辞書の引き方も分かりませんでした。（それは今も同じです。）一字一句ほかの方の手をとり、全部教えてもらうようなもので、まるで、邪魔をしに来たようだと思わずにはいられませんでした。活字に慣れた目には、手書きの文字はとても新鮮でした。ですが読みにくく、作業はなかなか進みません。あっという間の一日でした。それにしても～候（そうろう）が 50 種類以上もあると教えていただいたときはびっくりしました。

私にとって古文書整理作業は、母と一緒にできる楽しみが増えたことであり、半ば無理やり誘われた母が楽しそうに作業をしているのは、とても嬉しいことです。また、違いからの出発でしたが、実は仕事で行う図書資料の目録作成と同じで、限られた項目（情報）でもとの物を正確に著し伝えるデータを作り、利用（検索）のための標準化・電算化を目的とした毎日の作業と同じということに気づきました。最後にささやかですが、震災後の生協を通じての募金やテント村自立への資金貸付援助のほかに、何か直接役に立てないかという願いが少し叶うようでありがたいです。

まだまだ役には立ちそうにありませんが、楽しみながら続けていければと思っています。

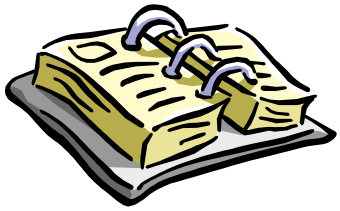
（おおいしやえい、川崎市在住）

会員対象アンケート集計・結果報告

先日、歴史資料ネットワーク個人会員対象にアンケート調査を実施いたしました。日頃のネットの活動に対するみなさまの生の声を聞き、今後の活動に活かしていきたいと考えたためです。ご協力いただきました会員のみなさま、あらためて御礼申し上げます。

アンケートの内容は、これまで史料ネットの**１企画内容・２ニュースレター・３情報発信のあり方**について、**たいへん満足・満足・ふつう・不満・たいへん不満**の５段階で評価していただきました。また、**４その他のネット**の活動も含めて、みなさまの史料ネットに対するご意見・ご要望を記入していただいております。以下がその集計結果となります。ニュースレター３３号の編集後記でも一部内容をご紹介いたしましたが、好意的な評価をいただいたり、厳しいお言葉をいただいたりと様々です。アンケートはがきを読み、励まされたり、気を引き締め直したりしつつ集計作業を進めました。アンケートを集計しながら感じたことですが、第一に情報発信の迅速化がについてのご要望が多かったという印象を受けました。事務局としては、情報発信の迅速化の手段のひとつとして、ホームページを開設し、その改善に努めていましたが、ホームページ自体の利用率の問題もあり、情報発信についてはさらなる工夫が必要であるように思いました。第二にニュースレターの内容に対するのご意見・ご要望が多かったことも印象的でした。編集・発送に携わる１人としては、様々なご要望があるということは、そのぶん熱心にニュースレターを読んでいただいている証拠であると（勝手に）解釈し、その点は喜ばしく思いましたが、同時に、今まで以上に多彩かつ魅力的な紙面作りに励んでいく必要があると、気持ちを新たにした次第です。

以上は事務局員の１人としての、私の個人的な感想ですが、今回のアンケート調査によるみなさまの貴重なご意見については、史料ネットの運営委員会で取り上げ、今後の活動の参考にしたいと考えております。まだまだ至らない点も多々ございますが、今後ともご指導のほど、よろしくお願い致します。（M）



【評価】

		たいへん満足	満足	ふつう	不満	たいへん不満	無記入
1	企画内容（市民講座・史料整理等）	4	26	12	1	0	5
2	ニュースレター	5	23	15	0	0	5
3	情報発信のあり方（ホームページ・行事案内等）	3	14	23	2	0	6

【コメント】

1．企画内容について

（たいへん満足）バラエティのある講座の内容が魅力的
（たいへん満足）郷土史がしげき的、古代も現代も
（たいへん満足）意欲的な企画に共感しています。特に中世の庶民に関連したものをこれからもお願したい
（たいへん満足）ユニークな内容が多いから
（満足）近代講座に参加した
（満足）史料整理をつづけてほしい
（満足）関心をもっているので、いいと思う
（満足）たいへん活発に企画されていると思う
（満足）市民講座へ２度参加し、興味がもてた
（満足）各時代を対象としているので
（満足）私のような素人にもよくわかります
（満足）資料に基づいての解説とそれと関係のある場所での開催に満足している
（満足）史料整理の情報は不足。いつ、どこで、など事前に情報がほしい
（ふつう）もう少し史料の公開とそのための講座・講演会を開いてほしい
（ふつう）参加できずにいるため、評価不可能というのが正直なところ
（不満）曜日・時間等にご一考を
（？）小生、貴会の企画に参加したことがないので評価のしようがないのですが、歴史研究と市民活動の連係を考える上で、貴会の活動は意義のあるものと思います

2．ニュースレターについて

（たいへん満足）丁寧な内容で、大いに勉強させていただいている
（たいへん満足）写真や関連学会の情報が掲載されるようになり、読みやすくなった
（たいへん満足）活動内容がわかるのが何より。関連団体の動きがわかるのが便利
（たいへん満足）関西圏の歴史史料活動が判って心強い
（たいへん満足）内容がつまっていて勉強になります
（満足）１回投稿（どうしても書けと言われた）
（満足）平素の努力に敬意を持っている
（満足）阪神間の各種情報をしることができ便利。今後もますます充実を
（満足）研究者から市民まで幅広い意見が載っており、読みごたえがあります
（満足）催し内容がよくわかる
（満足）他団体の動きなどを取り上げてほしいと思います
（満足）活動状況がわかり参考になります
（満足）今のところ、唯一の接点。定期的に送っていただけるのはありがたい。
（ふつう）もう少し開催予定の案内と、講演内容の抄録、文献リストの掲載を希望する
（ふつう）史料を詳細にしめして公開してほしいと考える
（ふつう）もう少し文字が大きいほうが読みやすい
（ふつう）報告中心ではなく、いつ、どこで、どの様な企画や会合があるのか、事前に早めにその情報がほしい。
（？）最近大きくなったのでしょうか？充分みておりません

3．情報発信のありかたについて

（たいへん満足）案内をいただき感謝している
（たいへん満足）ホームページでだいたいわかるので便利でありがたいです
（満足）史料の紹介（公開）を豊かに
（満足）もう少しだけ早く開催日がわかればありがたい
（満足）印刷体と組み合わせているのがいい
（満足）行事案内が便利で活用したい
（ふつう）平常心ですすめてください
（ふつう）あまりHPをみていない
（ふつう）まだ充分みていない
（ふつう）ハガキの案内が届くのが少し遅いように思う
（ふつう）行事の案内などは時間的な余裕をもって出してほしい
（ふつう）ホームページは今まで知らなかった。手間との兼ね合いもあるが、記録の蓄積という面がいずれ生きてくると思う。
（ふつう）HPはひとつの情報発信の方法であるというぐらいに考えていただきたい。ニュースレターやハガキを補助するものと位置づけて。
（不満）更新がおそい、催し案内がおくれる
（不満）行事に一般参加しにくいのでは
（？）HPみていない

4．その他ネットについて

・これからの神戸に関する行事に可能な限り参加させていただきたい
・史料の内容と公開や閲覧・講座をのぞむ
・ともかく継続は力なり
・近代講座のあと西代村の講演会が続き、行きづらいように思う。月１回くらいではどうか
・勉強のひとつの場を与えていただき、感謝しています
・皆さんでこつこつとお仕事を立派にやっておられる事に敬意を表す。歴史学の重要性を多くの人々に理解していただきたい
・入会させていただいて、半年。まだ史料ネットについてよくわかっていないので、今後ともよろしくお願いいたします。
・現地探訪、見学会などの計画をしてください
・活動には敬意を表しますが、当方の余裕のないため、積極的に関われずせめて講演会員（？）の末席に加えていただいている状態です。
・目は通していますが、それ以上突っ込んでいけません。なんとなく専門分野と思ってしまって･･･。
・いろいろ参考になっています。感謝します
・在野の団体（大阪歴史懇談会など）と協力してイベントを行ってみたらいかがですか
・適宜、成果・報告等出版されることを望む
・年が経つとともに震災と歴史資料との活用との関連が薄れていくように思います（仕方ないことかもしれませんが）
・個人会員の拡大に努力するべき。そのためには呼びかけと個人会員の意見を大切に。総会でも、個人会員がもっとものを言えるように配慮してほしい。自己紹介などもあってもよかったのではないか。
・今の状態で頑張っていかれたらいいと思う。
・地震の記憶が風化しつつある現在、１人１人が問題意識を持ち続ける事は、大変困難である。重大な被害にあった人ほど、忘れたいと考える現状であるが、ケアとの二本立ての取り組みが重要である。
・「Archivists in Japan」に史料ネットの案内をのせています。
・まったく活動に参加できず、申し訳ありません。アンケートもお答えできずにご容赦ください。
・震災から時間が経るに従い、又関東に住んでいると、この問題に関する意識がだんだん低下するが、大規模震災が予想される東日本で史料ネットのノウハウがどの様に生かし得るのか展望を示してほしい。
・プライバシーを理由に、資料公開に消極的な行政がありますが、積極的に対応して頂きたい
・活動を一定のレベルを維持しながら続けられることは、本当に大変なことだと思われますが、今後も継続してご活躍されることを期待します
・過去の記録ではなく、策定された被災時点からの活動マニュアルを公開してください。他地域で参照しますので。
・新聞での案内だけではなく、はがきで直接案内の方が良い。
・現在環境教育の大切さが叫ばれておりますが、歴

史と関連して考えたいと思っております。ご指導お願い申し上げます（例えば、聞き取り）（リサイクル、昔の資源活用法など）

■各研究会情報

神　戸　都　市　史　研　究　会

三　村　　昌　司

2003年7月21日（月）、神戸大学文学部において第５回神戸都市史研究会が開催されました。今回の研究会では、私が「明治20年代初頭における神戸商業学校問題の政治史的考察」というタイトルで報告致しました。神戸商業学校は、明治11年に神戸商業講習所として設立され、現在の神戸県立商業高等学校にあたります。

本報告では、新出の兵庫県会議事録などを交えながら、神戸商業学校の費用負担をめぐる市郡対立と、同時期に兵庫県の政界において生じていた政治状況（大同団結派と改進党の激しい対立）との関連を探りました。神戸商業学校問題は単なる地域的利害の対立という焦点だけではなく、この時期に新たに成立してきた政派（大同団結派）、あるいは再び結束を強めた政党（改進党）といった、地方政治状況の展開と関係して浮上してきた問題でした。

神戸商業学校をめぐる問題、特に成立期については史料上の制約もあり研究は多くありません。開港場神戸という地域の特質上、神戸商業学校の位置もまた地域において一定の意味を地域社会に有していたと考えられ、今後の史料発掘および研究の進展が期待されます。

早いものでこの神戸都市史研究会も発足してから１年余が過ぎました。これまでの５回の研究会で様々な報告がされてきましたが、今後も継続していくことによって、より有意義な研究会として近代都市史研究に資することに役立てていければ、と考えています。なお次回（第６回）の日程は未定ですが、10月下旬に開催できればと考えています。不明な点はお問い合わせください。

（みむらしょうじ、神戸大学大学院）

西　摂　研　究　会

河　野　　未　央

７月１９日（土）午前１０時から、尼崎市立地域研究史料館で、「兵庫津「方角」会所の機能とその変容―訴訟受理システムを中心に―」というタイトルで研究報告をおこなった。報告内容は、近世期、尼崎藩支配下の兵庫津において、兵庫津住民から提出された訴状はどのような過程を経て処理されていったのか、という訴訟受理システムのあり方に着目し、その変容をおったものである。主に、「方角」（＝兵庫津内部の地域的結合）ごとに存在する会所（＝兵庫津町役人の都市運営の場）での役割について検討した。

兵庫津では、１８世紀半ばまで訴状は、「方角」会所でも兵庫津住民どうしの訴訟に関しては、審議権を有し、陣屋（＝兵庫津奉行所）に取り次ぐか否かは、方角の町役人たちによって決定していた。しかし、このようなシステムは１８世紀の半ばに陣屋から町役人へ出された極秘の通達によって変更されることになる。通達は、これまで会所でなされてきた町役人による訴状の審議をやめて、全ての訴状を陣屋まで提出するよう命じたものだっ

た。

報告では、このような訴訟受理システムの変容の実態を示すのみで、変容がおこった背景についてまで十分にふれえなかったが、当日の議論は、このような背景についても議論が交わされた。特に、近世初期の段階でなぜ兵庫津の町役人にこのような審議権があったのか、という点や、幕府では、「相対済し令」が出されるなど、訴状の内容によっては民間の訴訟について関与しない方針をとっていたのに対し、陣屋ではなぜこのような幕府の政策とは逆の方針がとられたのか、という点などについて、議論が集中した。

当日のこうした議論の中で、尼崎藩支配のあり方とその独自性についても考慮する必要がある等、今後研究を深めていくうえで重要な視角について、たくさんご教示いただくことができた。このようなご教示をもとにして、今回の報告内容をひとつのかたちとしてまとめることができれば、と考えている。

（こうのみお、神戸大学大学院）

◎◎おしらせ◎◎

＜わがまち再発見＞

●○●○●よみがえれ！白鳳の大伽藍・猪名寺廃寺市民フォーラム●○●○●

９月２１日(日)園田公民館ホール

フォーラム（午前９時３０分～正午）

パネルディスカッション＜猪名寺廃寺の歴史と文化、その魅力を語る＞

　コーディネーター：山上　雅弘（兵庫県埋蔵文化財調査事務所主査）

パネリスト　　：岡田　　務（尼崎市教育委員会学芸員）・松田　常史（法園寺副住職）

　　寺田　良道（猪名寺自治会会長）・畑　喜一郎（自然と文化の森協会会長）

歴史ウォッチング（午後２時～午後４時）

猪名寺周辺を歩いてその魅力に触れます

＜ＪＲ猪名寺駅　午後１時３０分集合＞

猪名寺駅～猪名寺～猪名の笹原～黄金塚～猪名寺廃寺跡

かつて、猪名寺の地域に法隆寺式の七堂伽藍の優美な寺がありました。この寺は、織田信長の焼き討ちにあうまで約８００年もこの地に存在していました。また、この猪名寺廃寺跡周辺のどこを発掘しても縄文・弥生・古墳時代の遺物が出土するように、この猪名寺廃寺跡周辺は古くから集落地帯、生活の中心の場として栄えてきました。この尼崎市にあっては、最も早く栄えた地域でした。その地域の中で、猪名寺廃寺はシンボル的な役割を果たしていました。

私たちは、こうした猪名寺廃寺の歴史や文化的価値、その魅力などを多くの皆さんに知ってほしいとの思いから、この「よみがえれ！白鳳の大伽藍　猪名寺廃寺市民フォーラム」を企画しました。　是非ご参加ください。

〔お問い合わせ〕自然と文化の森協会　０６－６４９１－１９０７　畑　喜一郎

　　０６－６４９３－２８０２　内田　大造　　までお願いします。

主催：自然と文化の森協会

共催：猪名寺自治会

　　園田地区社会福祉連絡協議会

　　園田地区市民運動推進協議会

後援：尼崎市、尼崎市教育委員会

　　歴史資料ネットワーク（神戸大学）

史料ネットがこの４月に開催した第４回震災復興市民歴史講座「神戸の空襲・震災史をさぐる」における、辻川敦の報告内容をもとにした論文が、『空襲通信―空襲・戦災を記録する会全国連絡会議会報』第５号（2003 年７月発行）に「焼夷弾攻撃の目標をさぐる―神戸の事例から―」と題して掲載されました。講座での報告内容をもとに、さらにくわしく検討を加えて新事実をあきらかにした内容となっています。
同誌入手ご希望の方は、史料ネット気付・辻川まで。

◆編集後記　今号も盛りだくさんの内容になりました。
９月に入ってからの残暑の厳しさにまいっています。今日雨が降ったので、少しは涼しくなるでしょうか。
東北地震は、関西ではほとんど報道されないので現状がわかりにくいのですが、巻頭に緊急特集を組みましたように、多くの支援が必要な状況にあります。皆様のご協力を、ここで重ねてお願い致します。（め）

個人会員への入会と“News　Letter”購読のお願い

史料ネットの活動に平素からご協力いただき、ありがとうございます。
歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News　Letter”を年４回発行いたします（年間購読料：郵送費込み１０００円）。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。
また、表題にもありますように、ニュースレター会員・贈呈読者の皆様には是非とも個人会員へのご入会（年会費：個人会員５０００円、学生・院生会員は半額）ないしサポーター（一口３０００円以上）としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

史料ネット　郵便振替口座
名義：歴史資料ネットワーク
口座番号：００９３０－１－５３９４５

★史料保存関係のホームページ“Archivist　in　Japan”を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに連載していただいています。http://www.archivists.com/　または http://member.nifty.ne.jp/archivists.com/　または　http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/

史料ネット　NEWS　LETTER　No.34
編集・発行　　歴史資料ネットワーク
〒657-8501　神戸市灘区六甲台町１-１神戸大学文学部地域連携センター気付　史料ネット神戸センター
TEL&FAX:078-803-5565（開室時間　平日の午後１時　５　）時
URL:http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~　macchan/ e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp